

20221206日高圏域障がい者が暮らしやすい地域づくり委員会

「カフェデモンクえりもの取り組みについて」

カフェデモンクえりも副代表

浦河ひがし町診療所/小規模多機能ホームいろり

高田大志

医療法人 薪水 浦河ひがし町診療所



- ◇平成26年5月1日開院
平成27年4月1日医療法人化
- ◇外来診療・訪問診療・往診・訪問看護・デイナイトケア
- ◇グループホーム3棟
- ◇小規模多機能ホーム1事業所
- ◇相談支援事業所連携協力機関
- ◇小中学校・高校へのSC派遣

医療法人薪水 名称由来

「君は川流を汲め、我は薪を拾わん」漢詩由来の名言の中の一つである。

君は川の水を汲み私は薪を拾おう、そして食事の準備をしようという言葉に、その場に集う人々がお互いに協力し合い豊かな暮らしを作ろう。人と人とのつながりを広げ、当事者の力を活かし知恵を出し合いながら、安心して暮らせる場を創ろうという意味を込めたものである。



本日の報告内容

- ・精神科病棟廃止とカフェデモンクえりもの活動のはじまり
- ・カフェデモンクえりもの活動の発展
 - 交流の場～学びの場～世論形成～社会資源の創出～地域交流拠点として

「病床数の変遷」

日高東部の人口約五万人⇒約三万人
浦河町の人口二万二千人⇒一万千人



- 入院患者の減少
- 医師・看護師確保の困難さ

精神科病棟廃止(休止)の背景

- 苦渋の決断

過疎化、看護師不足、医師不足、一般科・救急医療の維持

- 地域移行と地域生活支援の充実

→ **空きベット**、病院経営の問題

- 反対運動

精神科問題、**認知症問題**、病院批判として話題が迷走

日本の精神科病床の多さ

「二つの二割」

- 世界全体の精神科病床の約175万床のうち、日本の精神科病床は約35万床。世界全体の精神科病床のおよそ2割。
- 日本全体の病床（内科や外科、救急病床など全ての病床）の約170万床のうち、精神科病床はおよそ2割。

認知症の人の隔離・収容の問題

【背景】

- 統合失調症の人の長期入院患者の減少による空ベッドの問題。
- 民間精神病院の経営維持のための認知症の人の入院。

上野秀樹「認知症 医療の限界、ケアの可能性」メディカ出版、2016

【実際】

- 認知症の人が精神科病院に入院した場合の平均入院期間は944日。
- 入院患者のうち近い将来、退院の見込みがない人は62.3%。

厚生労働省「精神病院における認知症入院患者に関する調査」(2010年9月)

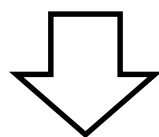
今後の認知症施策の方向性について

「かつて、私たちは認知症を何も分からなくなる病気と考え、徘徊や大声を出すなどの症状だけに目を向け、認知症の人の訴えを理解しようとするどころか、多くの場合、認知症の人をうとんじたり、拘束するなど、不当な扱いをしてきた。今後の認知症施策を進めるに当たっては、常に、これまで認知症の人々が置かれてきた歴史を振り返り、認知症を正しく理解し、よりよいケアと医療が提供されるように努めなければならない。」

今後の認知症施策の方向性について

「このプロジェクトは、『認知症の人は、精神科病院や施設を利用せざるを得ない』という考え方を改め、『認知症になっても本人の意志が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境でき暮らし続けることができる社会』の実現を目指している。」

厚労省 認知症施策検討プロジェクトチーム報告書2012



2012年 認知症施策推進五カ年計画(オレンジプラン)

→地域での生活支援と自己決定を支援する方向へ

→認知症初期集中支援チーム・身近型認知症疾患医療センター

2015年 認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)

Cafe de Monk(カフェ・デ・モンク)という活動をご存知ですか？

- ・東日本大震災後の被災地の仮設住宅を中心に傾聴活動。お坊さんたちが軽トラックに喫茶店の道具一式を詰め込んで、被災地を巡る「移動傾聴喫茶」。おいしいコーヒーを無料で提供しながら、被災者の話を聴くなごみの空間を提供。
- ・設立者は、宮城県栗原市の曹洞宗通大寺住職金田諦應氏。
- ・宗教・宗派を超えて傾聴活動で全国で13カ所を実施。

「モンクとは英語でお坊さんの事。平穏な日常にもどるには長い時間がかかると思います。あれこれ「文句」の一つも言いながら、ちょっと一息つきませんか？お坊さんもあなたの「文句」を聴きながら、一緒に「悶苦」します。」

カフェデモンクえりもの取り組み

・精神科医療がないえりも町への支援として、約25年前より浦河赤十字病院が巡回診療と訪問診療を実施。2014年5月から浦河ひがし町診療所が事業を継続。えりも町役場の一室で月二回外来診療を開設。えりも町住民対象の外来診療と訪問診療を行っている。

・一方でひきこもりがちな生活を送る若者、精神障害を抱える当事者とその家族、地域で孤立している住民、生活や将来に不安を抱えている住民などへのケアは不十分であった。

・これらの課題意識に対し、以前より親交の深かった文化人類学者浮ヶ谷幸代氏(相模女子大)が宗教家との連携を提案。2015年6月、浮ヶ谷氏は診療所のスタッフを連れて金田住職の宮城県栗原市通大寺を訪れる。その際、金田氏はその場でえりも町曹洞宗法光寺住職の佐野俊也氏を紹介する。

・その後、佐野住職との話し合いの末、第1回〈カフェデモンク・えりも〉を8月26日(水)、「えりも町交流館ひなた」で開催する。

・以後、月一回のペースで開催し、さまざまな立場の人がおよそ20人から30人が参加している。

カフェで文句聞かせて!

住職、牧師、看護師、町職員が相談乗ります



震災被災地がルーツ

【えりも】住職や牧師、精神科診療所の看護師、町職員らが、町内外からの参加者とお茶を飲みながら悩み相談に乗る「カフェ・デ・モンク」が27日、町交流館「ひなた」(本町)で開かれる。高城町の住職が日本大震災の被災者支援のために、仮設住宅をまわって被災者の悩みを聞く「カフェ・デ・モンク」ののれん分けで、道内で実施するのはえりも町のみという。(五十地隆彦)

あす、えりもで開催

「えりも」住職や牧師、精神科診療所の看護師、町職員らが、町内外からの参加者とお茶を飲みながら悩み相談に乗る「カフェ・デ・モンク」が27日、町交流館「ひなた」(本町)で開かれる。高城町の住職が日本大震災の被災者支援のために、仮設住宅をまわって被災者の悩みを聞く「カフェ・デ・モンク」ののれん分けで、道内で実施するのはえりも町のみという。(五十地隆彦)

カフェ・デ・モンクは、高城町高城原市の住職田中謙三さん(59)が、東日本大震災直後の2011年1月から高城・福島・岩手県を取り組んでいる。名称には「文句」を聞くと「意味を込めた。現在、熊本県や京都府を、えりもを含め全国で地域で行われている。

えりものカフェは、浦河の精神科クリニック「浦河ひがし町診療所」とえりも曹洞宗法光寺の共催。

同診療所の高田大副院長(56)が「精神科診療所のないえりもは精神障害者やその家族、悩みを抱える人誰かが相談できる場を作りたい」と、6月に高田さんのカフェを見学、金田さんから法光寺の住野住職(62)を紹介された。8月と9月は、えりものカフェで座禅体験を行った。

えりものカフェは曹洞宗浄土真宗の住職のほか、キリスト教の牧師が宗派や宗教の違いを超えて協力。来場者の相談に乗る。看護師は心の病の治療、町職員は行政制度の活用などについて助言する。

住野住職は「宗教の教えを押しつけるのではなく、参加者と同じ目線で悩みや喜びを分かち合いたい。気軽に参加して」と話す。

カフェは町交流館「ひなた」で毎月第4水曜日の午後2時〜4時開催。無料。お茶や菓子(手書き側が用意するが、持ち込みも可能。話の輪に加わらないボランティアも募集している。問い合わせは住野住職 090・8709・4007へ。

「カフェ・デ・モンク」の看板は、「参加者をどう増やすかが今後の課題」と話す住野住職



- 1 社会的に孤立しがちな人々の出会い、触れ合いの場を提供し、共に生きる地域を目指す。
- 2 医療、保健、福祉、教育の充実を図るために、立場の違う人々が集い、学ぶことができる機会を作る。
- 3 世代を超えた住民交流を通して、共に寄り添いながら助け合いの心を育てる。

カフェデモンク えりもの特徴

・宗教者や医療・福祉の専門家という一般社会での役割をほとんど問わない場であることが重要であった。他のカフェデモンクが当たり前とする、傾聴する側(宗教者)と苦悩の語り手(参加者)という一方向の役割関係は求められず、参加者の固定化しない関係性はカフェデモンク えりもの特性である。他方、専門家の構えが問われる場でもある。**精神医療の領域で専門家が持ち込みがちな「管理」「監視」のまなざしを、どこもあて差し控えることができるか「脱施設化」が問われるづける場所である。**

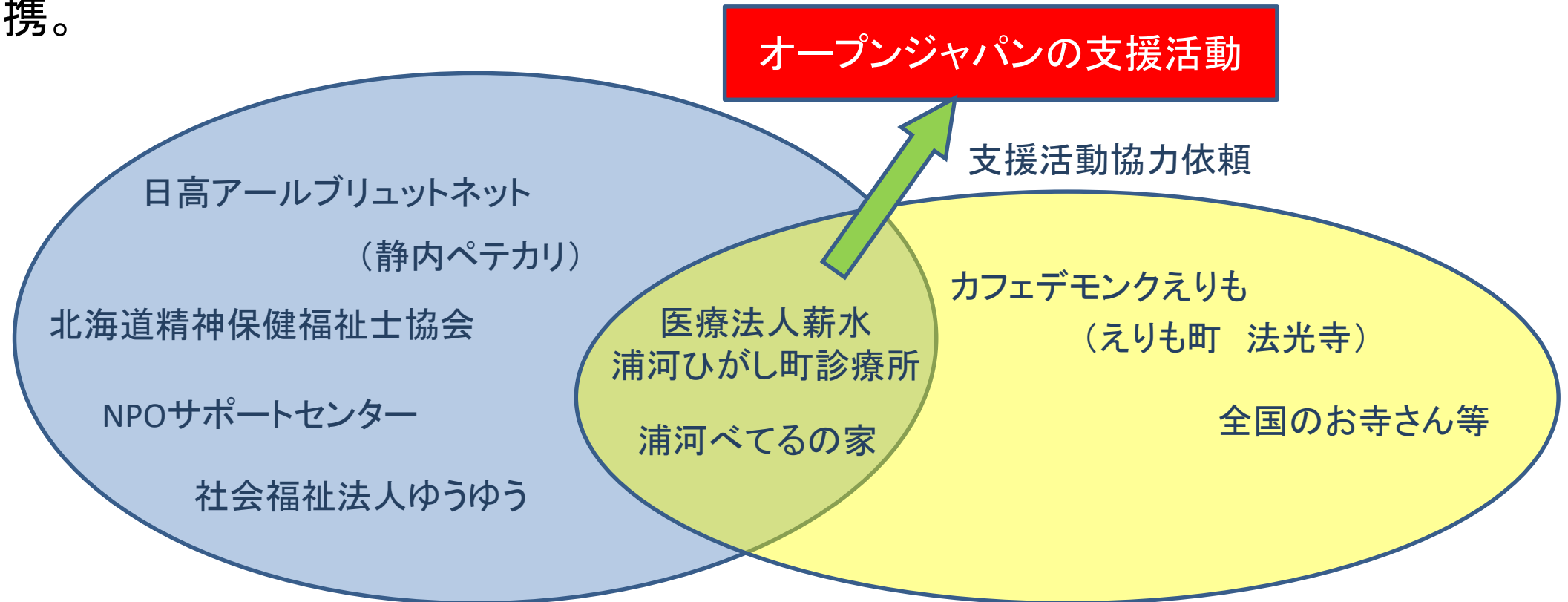
・これまでの病院医療であれば、専門科別の治療方針をもち専門的医療を提供してきたが、暮らしの場を基軸にするということは人の全体的生を対象とすることである。地域住民を主体とする活動は人々の暮らしと密着しており、住民主体を実現するためには**専門家の「脱施設化」という構え**が常に問われることを意味している。その上で「多世代共生」という時間軸で捉える世代交流の視点を掲げている。

浮ヶ谷幸代「居場所」を創る2018社会学論叢第192号

会の進行や運営、役員に精神障害を抱える当事者が入り、専門家らと共同して事業を支える。

災害支援の構成

- 災害直後より、オープンジャパンが厚真町にて支援を開始。
- 医療法人薪水がオープンジャパンへ支援活動協力を依頼。
- 医療法人薪水が、日高アールブリュットネットワーク、北海道精神保健福祉士協会等と連携。



当事者らと共同で被災地支援を行う



厚真町豊川地区の交流サロンで、住民と談笑する田中さん(左端)と柳さん(右端)＝1日

被災者がくれた勇気

【厚真、浦河】心の病を抱える中高年の浦河町の男性2人が、胆振東部地震で被災した胆振管内厚真町に通う。被災した高齢者で交流を続けている。浦河町では、同じように孤独や不安を抱える被災者が寄り添い、互いに支え合っている。浦河町から訪れた傾聴ボランティアの田中治太郎(49)と柳一彦(54)は、この地区で7回目の交流サロン「カフエモンキー」に集まった高齢者約10人と時間を過ごした。交流サロンは、被災地では「心の回復」に役立つとされている。浦河町では、被災地では「心の回復」に役立つとされている。浦河町では、被災地では「心の回復」に役立つとされている。

心患う男性2人 傾聴ボランティア

【必要とされている】実感
厚真町では「地域に必要とされている」と実感している。厚真町では「地域に必要とされている」と実感している。厚真町では「地域に必要とされている」と実感している。



被災者招き 一緒に稲刈り



稲刈りを終え記念撮影する川村院長(前列右端)と厚真町民(前列)ら

厚真支援続ける浦河「ひがし町診療所」

【浦河】町内の精神科クリニック「浦河ひがし町診療所」の患者らが育てた新米の稲刈りが21日、同町姉茶の水田で行われ、患者や家族、職員ら約100人が汗を流した。5年目の今年は、胆振東部地震で被災して仮設住宅などで暮らす厚真町民を初めて招待。ひがし町診療所は震災直後から、職員や患者が定期的に厚真へ出向き、体操教室や傾聴喫茶など厚真町民の心身のケアに携わっており、参加者たちは収穫を通じ、震災で生まれた絆を確かめた。

ひがし町

ボランティア活動による当事者の変化

「精神障害者になっているんなつらい経験をしてきたので、きっと被災者の方たちのつらさを理解し共感できると思う。」

「自分たちは病気を経験しつらい思いしてきたが、今は希望を持って生きることができ。そんな経験を被災者の方たちに伝えたい。」

「まさか精神障害者の自分たちが被災地支援に加わるとは思わなかった。任せてくれた以上、責任感を持って参加するために、自分の日頃の生活も整えていかなければならないと思った。」

日常で忘れがちな人と人との温かい心の持ち寄りとつながりの大切さを再認識し、自分たちの存在意義と人生を改めて考えるボランティア活動がリカバリーのプロセスに貢献している。

リカバリーを支援する重要な考え方 (Repper&Perkins, 2003)

◆サービス(および専門家)の中心的課題は、自分なりの目標を追求する人々をサポートする方法です。

希望を押し出し、持ち続けられるようにすることです

◆人が自分に起こったことに意味を見だし、症状と生活をコントロールする感覚を持つことを助けることです

◆このようにして、私たちは、「病を超えた」人生を送る**機会**を自分から取りに行くことができます

本日の報告内容

- 精神科病棟廃止とカフェデモンクえりもの活動のはじまり
- カフェデモンクえりもの活動の発展
 - 交流の場～学びの場～世論形成～社会資源の創出～地域交流拠点として

交流の場～学びの場～世論形成～社会資源の創出

- ・学び合いの機会の場→勉強会、映画上映会、シンポジウムの実施
- ・様々な立場の人たちの交流の場→サロン、住民参加型の地域デザインミーティング



浦河ひがし町診療所

これまで実施した勉強会

(平成28年度)

年間テーマ: 住み慣れた町でいつまでも

- ・宮城県名取市岡部医院研究所相澤出氏
- ・相模女子大教授浮ヶ谷幸代氏
- ・シンポジウム(相模女子大教授浮ヶ谷幸代氏・あおいけあスタッフ・川村院長・町保健師・佐野住職)

(平成29年度)

年間テーマ: えりも町で作る地域丸ごとケア

- ・小規模多機能ホームぐるんとびー 代表菅原健介氏
- ・カフェデモンク えりも創設者金田締應氏
- ・映画「ケアニン」&シンポジウム(相模女子大教授浮ヶ谷幸代氏・あおいけあスタッフ・川村院長・町保健師)

(平成30年度)

テーマ: 災害から身を守る

- ・一般社団法人OPEN JAPAN 吉村誠司氏・萬代好伸氏

テーマ: 支え合う暮らし

- ・美瑛慈光会阿部信一理事長・伊藤秀之部長(地域密着型介護事業部)

(令和元年度)

内容: 映画「僕とケアニンとおばあちゃん達と」&加藤忠相氏講演会



地域デザインミーティング（地域住民が我がごととして考える）

- 中学生の溜まり場が欲しい。
- 子供の居場所や食事提供される場所が欲しい。
- 転勤族の人とたちが地域の人と交流できる場所が欲しい。
- 小学4年生以降の子供の居場所が欲しい。
- お母さんが安心して子供を預けておしゃべりできる場所が欲しい。
- 災害時の避難拠点が必要。
- 障害を持っている人の居場所が必要。
- 託児まで行かないけどちょっと子供を見てもらえる場が欲しい。
- 買い物してもらわれる間ちょっと見てもらえる場所。
- 養護学校卒業後の人たちの支援の問題。
- 交通の便が不便。コミュニティバスみたいなものがあれば。

小規模多機能居宅介護とは

- 宅老所がはじまり(民家などを活用し家庭的な雰囲気の中で一人ひとりの生活リズムに合わせた柔軟なケアを行っている小規模な事業所をさす)
- 2006年に4月の介護保険法改正にて「小規模多機能型居宅介護」が新設。
- 地域密着型サービス
- 「通い」「泊まり」「訪問」を一体的に提供する取組み
- 必要に応じてかたちを変えて提供される柔軟性のあるケア

小規模多機能型居宅介護の誕生の理由

包括報酬で「通い」「泊まり」「訪問」機能を駆使し、まるで施設の持つ24時間365日の安心が地域の中で実現するようなイメージ

居宅介護

<メリット>

- ・自宅に暮らし続けられる
- ・地域の様々な資源や関係を活かせる
- ・個別的で自分らしい暮らしが可能

<デメリット>

- ・複数の事業者、資源が混在する
- ・家族や周囲の介護負担に依存する
- ・出来高報酬で経済的負担が大きい
- ・地域の資源やケアマネの力量が必要
- ・24時間365日に切れ目ができる

小規模多機能型居宅介護

施設介護

<メリット>

- ・24時間365日安心
- ・多専門職が包括している
- ・場所/人/ケアが変わらない
- ・包括報酬
- ・家族や周囲の介護負担が軽減される
- ・介護・医療・生活支援が一体的

<デメリット>

- ・自宅での暮らしが継続できない
- ・事業所が抱え込み
- ・地域との関係が途絶える
- ・一方的で画一的になり易い

地域交流拠点としての役割

- 思春期プログラム(精神科デイケア)の活動
- 地域交流イベント(餅つき、ビアガーデン...)
- 不登校となっている中学生の居場所
- スクールカウンセリングの面接
- 在宅で生活する身体障害者の入浴
- 看護や福祉を学ぶ学生の実習
- サービスに繋がらない認知症高齢者の短時間利用
- 小学生の福祉教育の場
- 高校生の職業体験

みんなの喫茶店
Cafe de Monk
カフェデモンク えりも

「カフェデモンク」は誰でも参加できるおしゃべりカフェです。
みんなでお茶とお菓子とおしゃべりを楽しめます。
ぜひお越しください!

坂田組土建(株) 笛舞土壌ヤード内
旧:ファームレストラン
えりも町笛舞217-1

14:00 ~ 16:00

参加無料・毎月【第4水曜日】開催

2022

5月25日	8月24日	11月30日
6月22日	9月28日	12月28日
7月27日	10月26日	

2023

1月25日
2月22日
3月22日

新型コロナウイルスの影響により、開催の中止もしくは
内容・場所の変更が生じることがあります。



カフェデモンクえりもとは?

生活や将来に不安な気持ちを抱えている方、
病気や障害を抱えている方やその家族、
ボランティアに興味を持っている方など
誰もが参加できるおしゃべりカフェです。

お坊さん、看護師さん、保健師さんなども
参加していますので、悩み相談もできます。
お気軽にお立ち寄りください。

お問い合わせ 浦河ひがし町診療所 (高田) 0146-22-7800
えりも町役場保健福祉課 01466-2-4888

主催 カフェデモンクえりも 後援 えりも町